

《第1分科会》  
時間秩序における意味と他者  
—歴史哲学／歴史叙述を問い直す

バンジャマン・コンスタンとオリエント  
——宗教と政治の歴史叙述をめぐって——  
杉本 隆司（明治大学）

サイードの『オリエンタリズム』（1978年）以来、19世紀ヨーロッパの東洋観、特に中東世界に対する帝国主義的・植民地主義的ヘゲモニーの言説をめぐり、人文社会科学の広い文脈で多くの議論が重ねられてきた。哲学・思想の領域でいえば、ルナンやミシュレ、ヘーゲルなどに代表される言語学者や歴史学者、哲学者たちに潜在するオリエントへの人種の蔑視ないし反セム主義がもっぱら批判の対象にされてきた。だが近年では、政治的・社会的な側面を含む19世紀ヨーロッパの精神史研究の進展により、そうしたオリエント蔑視・批判的言説を、その後の帝国主義・植民地主義の文脈というより、個々の時代状況や当時の政治的・宗教的文脈に即して具体的に明らかにしようとする研究も出てきている。例えば、オリエント世界を自由の意識の埋没状態として規定したヘーゲル（1770-1831）も、その主張の背後には当時のドイツ神話学の影響を受けたロマン主義者や宗教哲学に対する同時代的な批判が含意されていたことが知られている（ロジェ＝ポール・ドロワ『虚無の信仰』1997年、神山伸弘ほか『ヘーゲルとオリエント』2012年）。

この報告では、こうした観点からヘーゲルとほぼ同時代を生きた19世紀フランスの思想家バンジャマン・コンスタン（1767-1830）のオリエント批判を取り上げ、その歴史哲学におけるオリエント宗教の位置づけと、その歴史叙述の政治性に焦点を当てる。コンスタンは、小説『アドルフ』の著者にして、『征服の精神』と『政治的原理』を著したその時代の代表的な政治的自由主義の論客として知られるが、晩年に『宗教論』全五巻（1824-1831年）とその遺稿『ローマの多神教』全二巻（1833年）を著し、宗教史の膨大なテキストを残したことはあまり知られていない。これらは彼が政治論や文学で頭角を現す前から構想を抱いてきた四十年來のライフ・ワークに相当し、マイノリティー（プロテスタント）の立場から世俗権力の宗教権力への従属を批判しつつ政治的・宗教的自由の擁護のために独自の宗教史を構築しようとした点で、その後の一連の政治論と密接に繋がった一種の政治学の本でもあった。こうした宗教史＝人類史の政治性がコンスタンのオリエント批判とどのような関係にあったのかを、同時代の歴史・政治・オリエントをめぐる思想状況に照らしながら明らかにすることがこの報告の目的である。

コンスタンの活躍した19世紀前半は、フランス革命から七月王政まで王権と教会の政教一致体制が大きく揺らぎ、宗教と政治が徐々に分節化してゆくポスト革命期にあたる。この時期のフランスは「政治論争に歴史の権威が利用された時代」（中谷猛『近代フランスの自由とナショナリズム』1996年）と言われるように、キリスト教普遍史（教会史）に代わる多くの歴史哲学や神話学、歴史書が現れた。だがこれまで普遍史が与えてきた歴史の意味を刷新し、いわば世俗化することがこの時代の「歴史学」の役割であったとすれば、世界史（イストワール・ユニヴェルセル）とは本来的にニュートラルな概念ではなく、コンスタンの歴史研究も当時の社会体制に政治的指針を与える

《第1分科会》  
時間秩序における意味と他者  
—歴史哲学／歴史叙述を問い直す

思想的資源として同時代の政治論争と無縁ではなかった。歴史叙述の問題は、社会の権威の起源・到来を正当化する歴史的次元はもちろん、復古王政とカトリックの再国教化という当時の政治的状況とも結びついており、コンスタンにとってその理論闘争の場こそ広い意味での宗教史だったからである。

歴史と政治を巡る 19 世紀のこの言説空間に新たに参入して来たのが「オリエンタル・ルネサンス」(E・キネ『宗教精髓』1842 年)と呼ばれる思想潮流である。17 世紀のボシュエや 18 世紀のヴィーコの世界史と 19 世紀のそれが大きく異なるのはオリエントの知見の西欧への流入にあり、これまで普遍史から異教徒として除外されたオリエント民族を世界史にどのように組み込むかでカトリックとリベラル派ではその叙述の仕方に相違がみられた。この報告では、まず古代ギリシアを擁護し、古代オリエントの宗教と社会を激しく批判するコンスタンの宗教史の検討から、オリエント宗教にカトリック(カースト制や位階制など)を重ねながら後者に批判を加える彼の方法に焦点をあてる。これにより、コンスタンの他の政治論(例えば「古代人と近代人の自由」論文等)で批判される古代オリエント民族に重ねられたイメージの読み直しや、ナポレオン評価では対照的であるにも関わらず利用資料は重なることの多い同世代のヘーゲルの歴史哲学と比較することで、コンスタンのオリエント批判がロマン主義の時代に担っていた同時代的意味を明らかにしたい。